とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	太陽の子北小岩保育園
施設所在地	東京都江戸川区北小岩４丁目２９－２１
法人名	HITOWAキッズライフ株式会社

１．活動のテーマ

＜テーマ＞

絵本からつながるわらべ歌遊び

＜テーマの設定理由＞

（テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など）

朝の歌や季節の歌、手遊び等をクラスで楽しみ親しむ姿が見られる。また、絵本を通して物語を楽しんだり、感想を伝え合う姿がある。講師を交えわらべ歌に触れることで、子どもたちが日常的に歌や触れ合いを楽しめるような環境を作りたい。

２．活動スケジュール

７月：わらべうた講師の彦坂先生と打ち合わせを行う。全体のイメージを共有する中で、当初計画の５歳児のみの実施だったところを、対象の年齢を広げるように活動方針を決定した。
7月～：絵本貸し出し開始。廊下に絵本棚を設置し、家庭で絵本を読むことができる機会を作る。

7月29日：わらべうた講師の彦坂先生と各クラスで初めてわらべうたに触れる。スタッフにとっては聞き慣れない歌もあったが、子どもの反応は良く、初回から積極的に参加する様子が見られる。教わった歌は日常の保育でも子どもたちが口ずさんでいる姿がみられた。

8月18日・9月29日：彦坂先生との打ち合わせの中で、異年齢で実施することに変更した。異年齢で実施することで、年上の子どもが年下の子どもをリードするなど社会性が見られる。０，１，２歳児クラス➡クラスごと。３、４、５歳児➡異年齢グループ。その後５歳児のみで活動を行う。

10月27日・11月17日・12月22日：わらべうた講師をお呼びし、乳児は室内で、幼児クラスは戸外でのわらべうたを行う。乳児は一対一での関わり、幼児はペアや集団遊びのわらべ歌を知る。幼児クラスでは、戸外で活動することによって自由に体を動かせたり、集団遊びでのわらべうたや大縄跳びなどの小道具を使ってのわらべうたを知ることができた。

12月6日：生活発表会にて5歳児が今まで遊びながら練習してきたお手玉やまりつきの発表を保護者の前で行う。
1月19日：彦坂先生より１年間に触れたわらべうたを振り返る。その後子どもが選んだわらべうたを楽しむ。

３．活動のために準備した素材や道具、環境の設定

（活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具）

わらべうた講師 彦坂早苗先生の講師料
土間の絵本棚（より多くの本が入れられるようになり、絵本を選ぶ幅が広がった）、
絵本（絵本だけでなく季節の本や図鑑など多くの本に触れ知見が広がるように）、
小道具：お手玉、ゴムまり、縄跳び、大縄（わらべうたで歌に合わせて使うため。日常の中でいつでも子どもたちが触れ、楽しめるよう環境を設定した。戸外のわらべうた遊びでも使用）

４．探究活動の実践

＜活動の内容＞

１，講師の先生を呼び、クラスごと、また幼児は異年齢の縦割りグループに分かれた活動を行う。異年齢での関わりにすることで子ども同士の触れ合いが増え、互いに影響しあって良い関わりが見られた。活動後、必ず保育者個々で、子どもたちへの良い影響を文章化し提出することで振り返りを行う。

２，各クラス、日常的に保育や日々の生活の中にわらべうたを取り入れ、一対一や集団遊びにおいて常に歌に親しめる環境を作る。

３，絵本を廊下や土間に並べ、常に子どもたちの視界に入る環境作りをする。また、家庭への貸し出しを行い、親子での触れ合いの機会を作る。

４，5歳児クラスでは、お手玉やまりつきに興味を持った子どもたちが日々練習を重ね、その様子を発表会で保護者に披露した。

＜活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり＞

（活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等）

講師が毎月来て歌うわらべうたは、聴き心地がよく、くり返し歌いたくなる性質を持っているため、幼児クラスでは歌を覚えて何度もくり返す様子があった。また、新しく聞く言葉もあり、絵本や図鑑を通して「これのことだね」と知見を広げる姿も見られた。

また、「ふれあい」の視点で見ると、未満児ではわらべうたにより保育者と子どもが一対一で関わる環境を作ることができ、子どもが「もう1回やって」と楽しんでいたりにこやかに笑う様子があり情緒の安定にも繋がる様子があった。

幼児では、異年齢で関わることにより互いに影響を受け、同学年同士だけでは見られない関わりを見ることができた。特にペアになって行うわらべうたでは、年上の子が年下の子をリードしようとしたり、年下の子がその様子を真似したりと成長に繋がる様子が見られた。

5歳児クラスでのお手玉やまりつきは、その年齢発達ならではの手先の細かい動きや体の使い方により、好んで行う子が多くいた。日常に取り入れることにより上達していく姿を見て、発表会で保護者にも見てもらえるよう演目に取り入れると、各々練習に励み、自分の特技として自信に繋がる様子が伺えた。

５．振り返り

＜振り返りによって得た先生の気づき＞

以前までは、わらべうた自体は知っていても、少しのバリエーションしか知らない保育者がほとんどで、日常ではあまり取り入れられていなかった。
今回講師の方から本格的に教わることで、わらべ歌による子どもたちへの良い影響が多くあることに気づいた。
1番にふれあい、という点では、保育者と子ども、異年齢の子ども同士など、たくさんの関わりを生み出すことができ、それは「口ずさみたくなるリズムの歌」「手指などを使った適度なスキンシップ」があることが要因であると学んだ。
2番目に、遊びの道具が、わらべうたを用いることで取り組みやすい、という点である。お手玉、まりつき、大縄とびなどは、ただ使用して遊ぶよりもわらべうたに合わせ、リズムに乗って行った方が子どもにとって手に取るきっかけになりやすく、楽しんで行うことができると知った。
また、わらべうたに出てくる言葉や物語を知るために、以前よりも絵本を手に取り興味を持つ姿も見られ、知識を広げるきっかけにもなった。子どもだけでなく、わらべうたに出てくる言葉の意味を大人も一緒に知ることができた。
「わらべうた」によりふれあいや、子どもの興味、経験を広げる様々な姿が見られた。今回様々なわらべうたを保育者自身も学ぶことができたので、これからも年齢に合わせたわらべうたを日常的に保育の中に取り入れていきたい。また保育者は、今回勉強したわらべうたやその意味をそのままにせず、その歌の背景をより深く知り今後の保育や別の活動の興味へと繋げていきたい。
そして多くの絵本が入る絵本棚を作ることにより、絵本の貸出も増えた。自宅でもわらべうたで取り上げた絵本などを借り、今では全家庭の半分以上が貸出を利用するようになった。園での保育士や子ども同士の関わりだけでなく、家庭での親と子の触れ合いの時間を増やすことができた。